児童・思春期の親子関係と外在化型問題行動の 関連に対する親友関係の調整効果¹

酒井 厚 首都大学東京 江川 伊織 株式会社リバネス 菅原 ますみ
松本 聡子 お茶の水女子大学 相澤 仁 大分大学

**Moderating effects of best friendships on parent-child relationships and externalizing
problem behaviors in childhood and puberty**

Atsushi Sakai (*Tokyo Metropolitan University*), **Iori Egawa** (*Leave a Nest Co., Ltd.*), **Masumi Sugawara**,
Satoko Matsumoto (*Ochanomizu University*), and **Masashi Aizawa** (*Oita University*)

This study investigated the moderating effects of children's conflicting relationships with their best friends on how positive parent-child relationships buffer against children's externalizing problem behaviors directly or through their self-esteem. It also examined whether this moderating effect was conditional on children's age. Nine hundred and twenty-six elementary and junior high school students completed the questionnaire, which covered their sense of trust in parents, self-esteem, conflicting relationships with best friends, and externalizing problem behaviors. The results of a mediation analysis revealed that children's high sense of trust in parents buffered against externalizing problem behaviors by enhancing their self-esteem. However, moderated mediation analyses indicated that children with highly conflicting relationships with their best friends reduced the buffering effects of children's sense of trust in parents on externalizing behaviors both directly and through their self-esteem. These findings were discussed in terms of the children's conflicting relationships with their best friends and the children's perception of ego-threat.

Key words: childhood and puberty, parent-child relationship, best friends, self-esteem, externalizing problem behavior.

The Japanese Journal of Psychology

2019, Vol. 90, No. 1, pp. 11–20

J-STAGE Advanced published date: December 25, 2018, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17053>

児童・思春期における多動・不注意や攻撃性といった外在化型問題行動（externalizing problem behavior：以下、EXT とする）は、その後の心理社会的な発達や適応を困難にする大きなリスク要因である（Allen, Porter, McFarland, McElhaney, & Marsh, 2007）。従来の

研究は、EXT に関わる要因として、対人関係（Rothbaum & Weisz, 1994）、パーソナリティや気質（De Pauw & Mervielde, 2010）、認知的要因（Dodge & Pettit, 2003）、遺伝（Burt, 2009）など、環境と個人的特性の両面から検討してきた。なかでも、この時期の子どもの心理社会的な適応にとって重要なサポート源である親や仲間（Furman & Buhrmester, 1992）との関係性を扱った研究は国内外で行われ、親子間の安定した愛着や温かい養育、仲間との良好な関係性が EXT と負に関わり、放任的な養育や反社会的な行動のある仲間との交際が EXT と正に関わることが示されている（Leadbeater, Kuperminc, Blatt, & Hertzog, 1999; Vitaro, Tremblay, Kerr, Pagani, & Bukowski, 1997; 菅原他, 1999; 吉澤・吉田, 2010）。

Correspondence concerning this article should be sent to: Atsushi Sakai, Faculty of Humanities and Social Sciences, Tokyo Metropolitan University, Minami-Osawa, Hachioji 192-0397, Japan. (E-mail: sakai-atsushi@tmu.ac.jp)

¹ 本研究は、平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）の助成を受けた。また、本研究は、日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会（2017）で発表したデータを再解析したものである。

こうした親や仲間との関係性は、両者が相互に調整し合いながら子どものEXTに関わることも報告されている。例えば Galambos, Barker, & Almeida (2003) は、小学 6 年生を対象に 3 年半の縦断研究を実施し、親が子どもの行動を適度に管理できていれば、子どもが反社会的行動傾向の高い仲間と付き合っている場合でもEXTを抑制する防御要因になることを示した。また、Jager, Yuen, Putnick, Hendricks, & Bornstein (2015) は中学生に行った横断調査から、親への不信や葛藤があるなど親子間にリスクがある場合に、仲間関係の良好さが防御要因となりEXTが低くなることを報告した。さらに、Lansford, Criss, Pettit, Dodge, & Bates (2003) が行った小学 5 年生から中学 1 年生にかけての縦断研究では、親による子どもの行動管理が厳しくリスクがあると、仲間からの受け入れや親しい友人関係が良好であればEXTが抑制されるが、仲間や親しい友人の反社会的行動傾向が高いとEXTが助長されていた。このように、親と仲間双方との関係性は、EXTに対してどちらかの状態がリスクを伴う場合にもう一方の関係性が良好であれば防御要因となり、両者がリスクを抱えていればEXTを相加的に高めることが伺える。

一方、親と仲間双方の関係性間に、EXTの抑制における補填関係がみられないことを示す研究もある。Chen, Chang, He, & Liu (2005) は、中国人の小学生を対象に縦断研究を行い、親が子どもに温かく接し援助的であっても、その情緒的な関係性によるEXTへの抑制効果が仲間の反社会的な特徴によって軽減されることを示した。しかし、同様な観点による研究はまだ少なく、他の年齢段階での結果などは検討されていない。例えば、Chen et al. (2005) による上記の結果は、小学 6 年生よりも小学 3 年生で顕著にみられていた。これは、子どもの仲間関係を普段から付き合いのある不特定の相手に評価しているために、仲間として行動の類似性を重視する年齢段階 (Furman & Bierman, 1984) にいる小学 3 年生の方が、周囲にいる仲間の反社会的行動に感化されやすかったことによると推察される。しかし、小学校高学年になると、子どもは仲間に情緒性や親密性を求め (Furman & Bierman, 1984)、周囲にいる仲間の中でも親しい友人の存在が心理社会的な適応にとって重要になるとされる (Newcomb & Bagwell, 1995)。また、中学生では親しい友人を親以上に信頼してコミュニケーションの相手に選ぶ傾向や (Nickerson & Nagle, 2005)、親しい友人とのいざこざなど葛藤関係の高さがストレスとなり怒りや不安を喚起させ、攻撃性のリスクが高まるという知見 (Carter, Garber, Ciesla, & Cole, 2006; Kupersmidt, Burchina, & Patterson, 1995; 岡田, 2002) がある。そのため児童・思春期では、親子間の情緒的な関係性によるEXTの抑制効果を軽減する仲間や友人とのネガティブな関係として、仲間集団との行動的な類似性ばかりでなく親

しい友人との葛藤関係に注目することも必要であろう。そこで本研究では、当該時期の子どもを対象に、親子間の情緒的な関係性がEXTを抑制することに対して、従来ではまだ扱われていない親しい友人 (以下、親友とする) との葛藤関係による調整効果に焦点をあてて検討を行う。

親子間の情緒的な関係性とEXTとの関連については、こうした直接的な関連ばかりでなく、両者を介する要因 (認知や情動過程など) を含めたプロセスの検討も行われている (Dodge & Pettit, 2003)。Kim & Cicchetti (2004) が、7 歳から 12 歳までの子どもを対象に自尊感情を媒介要因として行った研究もその 1 つと言えよう。Kim & Cicchetti (2004) は、幼少期における養育者との愛着関係が自己や他者についての期待や信念に関する表象モデルを形成するという仮定 (Bowlby, 1969) と、愛着関係が自己認識など自己の発達の個人差に関わるとする知見 (Schneider-Rosen & Cicchetti, 1991) から、母子の愛着関係が子どもの自尊感情を介してEXTに関わるパスモデルを検討した。その結果、子どもによる母親との安定した愛着関係や養育の温かさの認知が、子どもの自尊感情を高めることを通じてEXTの低さを間接的に予測していた。自己概念や自尊感情の発達に関する理論 (Coopersmith, 1967; Epstein, 1973) および実証研究 (Harter, 1988) から、児童期以降の子どもは親との普段の関係に基づき、親を中心とした重要な他者から受容されている感覚を発達させると同時に、自分がどう評価されているのかについて考える経験を重ね、自己を認識することを通して自尊感情を発達させていくとされる。また、Donnellan, Trzesniewski, Robins, Moffitt, & Caspi (2005) が、自尊感情の低さが社会への絆を弱め (Rosenberg, 1965)、社会への絆の弱さが反社会的行動への抵抗を弱める (Hirschi, 1969) という主張をもとに、11 歳と 13 歳の 2 時点における因果分析を行った結果では、自尊感情がEXTを負に予測することが示されている。

これらを合わせれば、子どもが親との関係を情緒的に良好であると認知することが自尊感情を高め、それがEXTを抑制する防御要因となり、反対に親子関係が良好でなければ自尊感情が低く、EXTを高めるリスク要因となると考えられよう。とくに第二次性徴を迎える頃は、自己への注目が高まるとともに自尊感情が心理社会的な適応に関わる (古荘, 2009; 齊藤・松本・菅原, 2016) ため、その傾向がより強い可能性がある。

ここで、親子関係に基づく自尊感情が低くEXTに対してリスク要因になる場合、親友との葛藤関係が高ければリスクが加算 (Evans, Li, & Whipple, 2013) されEXTは高くなると考えられる。一方、親友との葛藤関係が低ければリスクは加算されない。しかし、子どもの親友関係の質は、葛藤といったネガティブな要因と関係の良好さなどのポジティブな要因間に相関が

みられることが少なく、独立した2次元と捉えるべきとの知見 (Berndt & McCandless, 2009) があり、葛藤関係が低いからといって、親友関係の良好さのようにEXTへの防御要因 (Jager et al., 2015) とはならず、EXTは低くならないと予想される。

また、親子関係に基づく自尊感情が高くEXTに対して防御要因になる場合は、親友との葛藤関係が低ければその効果が維持されるであろう。一方、葛藤関係が高くリスク要因となる場合には、親子関係に由来する自尊感情の防御要因としての機能と拮抗する状態となる。

これまで、自尊感情と仲間や親友との葛藤関係が互いに調整し合いEXTに関わることを検討した研究はみられない。しかし、Baumeister, Smart, & Boden (1996) が、自尊感情と攻撃性や犯罪との関連について主張した自己本位性脅威モデル理論は参考にならう。この理論では、自尊感情が高くても攻撃性が高くなる場合を、自尊感情が過度に高く好ましい自己表象を有する個人が、周囲から否定的な評価を受けたとき、自分自身と他者からの評価のズレによって自我脅威を知覚することで、自衛的な反応の1つとして攻撃性を示すと説明する。自己に注意が向きやすい思春期頃の子どもも、自尊感情が高く、自分にとって重要な他者である親友とけんかになったり悪口を言われたりする葛藤経験が多いと自我脅威を感じ、攻撃的に振る舞う可能性は考えられよう。また、自我脅威を知覚しその対処として攻撃的に振る舞うことは、能動的攻撃と反応的攻撃に分けた場合には後者に該当する。幼児期から小学3年生までの攻撃性を縦断的に検討した Dodge, Lochman, Harnish, Bates, & Pettit (1997) は、反応的攻撃が継続的にみられる子どもの方が、能動的攻撃がある子どもよりも不注意や衝動的な行動的特徴が多いと報告している。そのため、児童・思春期の子どもにとって、自尊感情が高くても親友との葛藤関係が高い場合には、自我脅威に基づく対処行動から攻撃性やそれに付随する不注意や衝動的な行動が喚起され、自尊感情の高さが防御要因として機能せず、結果としてEXTが高くなることが予想される。こうした自尊感情を媒介したモデルによる検討は、親子間の情緒的な関係性が高くても仲間とのネガティブな関係性によってEXTが抑制されないことについて、そのプロセスの1つを示すことができるかもしれない。

以上から、本研究では小学校高学年生と中学生を対象とした横断調査を行い、親子間の情緒的な関係性として子どもが親に抱く信頼感に注目し、直接的にまたは自尊感情を媒介して間接的にEXTを抑制する効果について、親友との葛藤関係がどのように調整するかを検討する。

また、先述のように当該年齢の子どもは対人関係の比重が親から親友へと変わっていく時期にあり、親子

間の情緒的な関係性が安定し自尊感情が高くても、親友との葛藤関係が強ければEXTを抑制する効果が弱まり、その傾向は親友の重要度が増す青年期にかけて顕著になると予想される。そこで今回は、親友との葛藤関係による調整効果が子どもの年齢によってどのように異なるかについても検討する。

具体的な仮説は以下の4つである。第1に、子どもが親に抱く信頼感の高さはEXTを抑制するように関わるが、Chen et al. (2005) の結果と類似して、親友との葛藤関係が高い場合にはその効果が軽減される。第2に、子どもが親に抱く信頼感の高さが自尊感情を高めることを介して間接的にEXTを抑制する。第3に、親友関係での葛藤が高い場合には、子どもの親に抱く信頼感に基づく自尊感情が低いとリスクが加算されるためEXTが高くなる。同時に、自尊感情が高い場合にも自己本位性脅威モデル理論によりEXTを抑制する機能が阻害され、結果としてEXTが高くなる。第4に、これらの親友との葛藤関係による調整効果は子どもの年齢が高くなるほど顕著にみられる。

方 法

対象者と手続き

A県内の公立小・中学校に調査を依頼し、承諾を得た2つの小学校、3つの中学校において、ホームルームの時間を利用して質問紙調査を実施した。調査は担任教諭が教室内で実施し、調査票を配布後に表紙に記した調査の主旨と秘密厳守であることを子どもに伝え、回答が難しい場合には未回答のまま提出するよう依頼した。調査票は、児童・生徒が無記名で記入後に個々の封筒に入れて提出した。有効回答者数は、小学生では4年生が140名、5年生が122名、6年生が143名の計405名(男子196名、女子209名)、中学生では1年生が166名、2年生が174名、3年生が181名の計521名(男子268名、女子253名)であった。平均年齢は小学生が10.96歳(9—12歳)、中学生が13.95歳(12—15歳)であった。調査時期は2005年2月であった。

調査内容

子どもが親に抱く信頼感 親子間の情緒的な関係性の一側面を評価する指標として、酒井(2005)がErikson(1963)による養育者への基本的信頼に関する理論およびBowlby(1973)の内的作業モデル理論を参考に作成した青年期版対人的信頼感尺度を使用した。本尺度は、母親および父親に抱く信頼感を「相手は自分に対してどのような信頼感覚を抱いているか」と「自分は相手に対してどのような信頼感覚を抱いているか」の2つの方向性から評価するものであり、「〇〇はあなたを一番信頼していると思いますか」や

「〇〇をだれよりも信頼できますか」などの 8 項目で構成された。今回は、〇〇にお母さんとお父さんという言葉を入れた計 16 項目を用意し、「5: あてはまる」—「1: あてはまらない」までの 5 件法で回答を求めた。全項目の内的整合性を示す α 係数は .96 であり、全項目の合計得点が高いほど親に抱く信頼感の高さを表すこととした。

子どもの自尊感情 眞築城・菅原・酒井・菅原 (2007) が Self-perception profile for children (Harter, 1985) を邦訳して作成した、改訂・自己知覚尺度日本語版の低位尺度である全体的自己価値感尺度を使用した。今回は小学 4 年生から中学 3 年生までに同一の項目を使用するため、児童期版の一部を改変して使用した。項目は「一人の人として自分に満足している」など 5 つであり、「4: よくある」—「1: ない」までの 4 件法で回答を求めた。全項目の内的整合性を示す α 係数は .75 であり、全項目の合計得点が高いほど自尊感情の高さを表すこととした。

親友との葛藤関係 第 1 著者が原著者に許可を取り、心理学を専攻し日本語と英語に精通する研究者とバックトランスレーションを行い、Friendship Quality Questionnaire (Parker & Asher, 1993) の邦訳版を作成した (未発表)。今回は親友との葛藤関係に焦点をあてるため、本尺度を構成する 6 因子のなかで、「〇〇さんと私はよくけんかする」、「〇〇さんはときどき私の悪口を他の子に言う」などの 7 項目から成る「葛藤と裏切り」因子を使用した。対象児が親しい友人の人数を記入した後に、その中で「一番仲のいい親友」を特定してもらい、その相手との葛藤関係を、「4: すごくよくあてはまる」—「0: ぜんぜんあてはまらない」までの 5 件法で回答を求めた。 α 係数は .78 と十分な値であり、合計得点の高さが親友との葛藤関係の高さを表すこととした。

子どもの外在化型問題行動 第 3 著者が原著者に許可を取り、心理学を専攻し日本語と英語に精通する研究者とバックトランスレーションを行い Strengths & Difficulties Questionnaire (以下、SDQ とする: Goodman, 1997) の自記入版を作成した²。本研究では、オリジナルの 5 因子のなかで EXT に該当する「行為」と「多動・不注意」を使用した (Goodman, Lamping, & Ploubidis, 2010)。行為は「カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある」などの 5 項目、多動・不注意は「すぐに気が散りやすく、注意を集中できない」に

代表される 5 項目で構成され、「2: あてはまる」—「0: あてはまらない」までの 3 件法で回答を求めた。全項目の α 係数は .63 であり、同尺度を使用した先行研究 (Di Riso et al., 2010) と類似する値であり許容範囲と判断した。以降の解析では 10 項目の合算を EXT 得点とした。

解 析

本研究では、Figure 1 に示すモデルを検討するため、解析を大きく 2 段階に分けて行った。まず、親に抱く信頼感が直接的に、また自尊感情を介して間接的に EXT の低さに関わることを媒介分析により検討した。媒介分析は、ある説明変数 X が媒介変数 M を介して目的変数 Y に影響する媒介関係を調べるための手法である。本研究では、Hayes (2013, pp. 85–122) の方法に従い、 X (親に抱く信頼感) で M (自尊感情) を説明する回帰分析、および X と M で Y (EXT) を説明する回帰分析から直接効果・間接効果について検討した。また、媒介分析を行うに際し、 X と M の間に Y に対する交互作用がないことを確認した (Hayes & Preacher, 2014)。間接効果の検定は、バイアス補正ブートストラップ法 (10,000 ランダムサンプリング) により 95% 信頼区間を算出する方法を用いた。

つぎに、この媒介関係に対して親友との葛藤関係と年齢が及ぼす調整効果について調整媒介分析により検討した。調整媒介分析は、媒介効果が調整変数によって変化するモデルの分析である (Hayes, 2013, pp. 325–355)。親友との葛藤関係は、親に抱く信頼感から EXT へのパスおよび、自尊感情から EXT へのパスを調整する変数とし、親に抱く信頼感から EXT への直接・間接効果への調整効果を検討した。また、親友との葛藤関係を調整する変数として年齢を加え、この 2 つの調整変数による交互作用項が、親に抱く信頼感から EXT へのパスおよび、自尊感情から EXT へのパスを調整する 2 次の交互作用項をモデルに投入した。

Leadbeater et al. (1999) など先行研究の多くが EXT は男子の方が高いと報告していることから、性別を共変量としてモデルに投入し、モデルで使用する独立変数は多重共線性の問題を回避するために中心化した。

Figure 1. 親に抱く信頼感から EXT への直接・間接効果に対して親友との葛藤関係と年齢を調整変数とした調整媒介分析モデル。

注) EXT: 外在化型問題行動。

² SDQ の自記入版については、以下のホームページから閲覧可能である。http://www.sdqinfo.com/py/sdqinfo/b3.py?language=Japanese (2018 年 4 月 22 日)。また、本尺度の対象年齢は 11 歳以上であるが、8 歳から 10 歳までの児童への有効性が報告されている (Muris, Meesters, Eijkelenboom, & Vincken, 2004; Van Roy, Veenstra, & Clench-Aas, 2008)。

Table 1
各変数の基本統計と変数間の関連

変 数	1	2	3	4	5	平均 / %	SD	範囲
1. 性別 (1:男子, 0:女子)	—					50.10% (男子)		
2. 年齢	-.00	—				12.64	1.72	9—15
3. 親に抱く信頼感	-.17 **	-.34 **	—			56.63	15.12	16—80
4. 自尊感情	.12 **	-.30 **	.42 **	—		11.85	3.49	5—20
5. 親友との葛藤関係	.05	.17 **	-.12 **	-.16 **	—	7.88	5.33	0—25
6. EXT	.23 **	.14 **	-.27 **	-.24 **	.28 **	6.33	3.07	0—17

注) EXT：外在化型問題行動。性別と他の変数はポリシリアル相関、他はピアソン相関。

** $p < .01$

解析には SPSS 22.0 for Windows を使用した。媒介分析および調整媒介分析には、SPSS マクロである PROCESS (Hayes, 2012) を使用した。性別と他の変数間のポリシリアル相関および単純傾斜の分析は、R version 3.4.2 を用いた。

結 果

親に抱く信頼感が EXT を抑制する効果と調整要因による効果の検討

はじめに、子どもが親に抱く信頼感による EXT への直接的な抑制効果と、自尊感情の高さを媒介して抑制する間接効果を検討するため媒介分析 (Hayes, 2013) を行った。解析では性別を共変量として投入した。媒介分析に先立ち、親に抱く信頼感と自尊感情および両者の交互作用、共変量としての性別を独立変数とし、EXT に対する重回帰分析を実施したところ、交互作用は有意でなかった ($\beta = -.033, ns$)。

媒介分析の結果、親に抱く信頼感の高さから EXT への回帰係数 ($\beta = -.164, p < .01$) が有意となり直接効果がみられた。また、親に抱く信頼感の高さから自尊感情を説明する回帰係数 ($\beta = .444, p < .01$) および自尊感情から EXT を説明する回帰係数 ($\beta = -.183, p < .01$) がいずれも有意、間接効果 (indirect effect = $-.017$, 95%CI $[-.024, -.010]$) も有意であり、親に抱く信頼感の高さが自尊感情の高さを介して EXT を抑制する間接効果が示された。

つぎに、親に抱く信頼感が EXT を抑制する直接・間接効果に対して親友との葛藤関係が調整し、その調整効果が子どもの年齢により異なるかを調整媒介分析により検討した。Table 1 に示す変数間の相関からは、親友との葛藤関係は親に抱く信頼感 ($r = -.12$) と自尊感情 ($r = -.16$) と負相関であり、EXT との間では正相関 ($r = .28$) であった。年齢は親に抱く信頼感 ($r = -.34$) と自尊感情 ($r = -.30$) との間で負相関、EXT とは正の相関 ($r = .14$) であった。いずれも 1% 水準で有意であった。

調整媒介分析 (Table 2) では、EXT に対する説明変数を 2 段階に分けて投入し、ステップ 1 では子どもの性別、親に抱く信頼感、自尊感情、親友との葛藤関係および年齢の各変数を、ステップ 2 では親に抱く信頼感と自尊感情および各調整変数 (親友との葛藤関係と年齢) で構成された交互作用項を加えて検討した。その結果、ステップ間に有意な重決定係数の変化が認められた ($\Delta R^2 = .034, p < .01$)。

Table 2 の交互作用項の結果を見ると、EXT に対する直接効果に関しては親に抱く信頼感と親友との葛藤関係の交互作用 ($\beta = .098, p < .01$) が、間接効果に関しては自尊感情と親友との葛藤関係および年齢の 2 次の交互作用 ($\beta = .070, p < .05$) が有意であった。

親に抱く信頼感と親友との葛藤関係の交互作用が EXT に対して有意であったことから、Aiken & West (1991) の手法に基づき、独立変数に $\pm 1SD$ の値をそれぞれ代入し、親友との葛藤関係が $\pm 1SD$ それぞれの場合の単純傾斜を求めた。その結果 (Figure 2)、

Figure 2. 親に抱く信頼感が EXT を抑制するように関わることに對する親友との葛藤関係の調整効果。

注) EXT：外在化型問題行動。

Table 2

親友との葛藤関係と年齢を調整変数とした場合の親に抱く信頼感による EXT への直接効果・間接効果の検討

目的変数	説明変数	B (β)	SE	95% CI			
自尊感情	性別	1.096 (.157) **	.207	[.690, 1.501]			
	親に抱く信頼感	.103 (.444) **	.007	[.089, .116]			
	R^2 (調整済み)	.202					
EXT		ステップ 1			ステップ 2		
		B (β)	SE	95% CI	B (β)	SE	95% CI
	性別	1.035 (.169) **	.189	[.664, 1.406]	1.007 (.164) **	.187	[.640, 1.375]
	親に抱く信頼感	-.031 (-.151) **	.007	[-.045, -.017]	-.034 (-.168) **	.007	[-.048, -.020]
	自尊感情	-.132 (-.151) **	.030	[-.192, -.073]	-.143 (-.162) **	.031	[-.203, -.083]
	親友との葛藤関係	.130 (.227) **	.018	[.096, .165]	.140 (.244) **	.018	[.104, .176]
	年齢	.006 (.003)	.058	[-.109, .120]	-.011 (-.006)	.058	[-.124, .103]
	親に抱く信頼感×親友との葛藤関係				.004 (.098) **	.001	[.001, .006]
	自尊感情×親友との葛藤関係				.013 (.088) *	.006	[.003, .024]
	親に抱く信頼感×年齢				.007 (.061)	.004	[.000, .015]
	自尊感情×年齢				-.025 (-.047)	.017	[-.058, .009]
	親友との葛藤関係×年齢				.034 (.099) **	.011	[.013, .056]
	親に抱く信頼感×親友との葛藤関係×年齢				.000 (.013)	.001	[-.001, .002]
	自尊感情×親友との葛藤関係×年齢				.006 (.070) *	.003	[.000, .012]
	R^2 (調整済み)	.165 **			.192 **		
	ΔR^2	.034 **					

注) EXT : 外在化型問題行動。

* $p < .05$, ** $p < .01$

+1SD ($\beta = -.021, p < .05$) と -1SD ($\beta = -.067, p < .01$) のいずれの条件でも単純傾斜は有意であった。

自尊感情と親友との葛藤関係および年齢による 2 次の交互作用についても同様な方法を用いて、親友との葛藤関係と年齢それぞれの高低 ($\pm 1SD$) の組み合わせごとに単純傾斜を求めた。Figure 3 に示すように、親友との葛藤関係が -1SD の場合には年齢の高低 (+1SD: $\beta = -.312, p < .01$; -1SD: $\beta = -.117, p < .05$) にかかわらず単純傾斜が有意になり、親友との葛藤関係が +1SD の場合には、どちらの年齢 (+1SD: $\beta = -.057, ns$; -1SD: $\beta = -.085, ns$) でも傾きは有意でなかった。

以上の結果から、親に抱く信頼感から自尊感情を介して EXT を抑制するように関わる間接効果は、主に親友との葛藤関係の程度によって調整されることが考えられた。親友との葛藤関係得点と年齢の両者について +1SD (高) と -1SD (低) のレベルを用意し、それらを組み合わせた 4 条件における間接効果の有意性を検討したところ、Table 3 に示すように親友との葛

Figure 3. 自尊感情が EXT を抑制するように関わることに對する親友との葛藤関係と年齢の調整効果。

注) EXT : 外在化型問題行動。

Table 3

親に抱く信頼感が自尊感情を介して EXT を抑制する間接効果の比較（調整変数の高低による検討）

親友との葛藤関係 / 年齢	間接効果	SE	95% CI
親友との葛藤関係（低） / 年齢（低）	-.012 *	.006	[-.024, -.001]
親友との葛藤関係（低） / 年齢（高）	-.032 *	.008	[-.045, -.018]
親友との葛藤関係（高） / 年齢（低）	-.009	.007	[-.023, .004]
親友との葛藤関係（高） / 年齢（高）	-.006	.007	[-.019, .007]

注）EXT：外化型問題行動。低は -1SD、高は +1SD の値を示す。

* $p < .05$

藤関係が高いレベルになると、間接効果が有意ではなくなることが示された。

考 察

親に抱く信頼感が EXT を抑制する効果と親友との葛藤関係による調整

本研究では、児童・思春期の子どもを対象に、子どもが親に抱く信頼感が直接的にまたは自尊感情を媒介して間接的に EXT を抑制する過程について、親友との葛藤関係がどのように調整するか、またその調整効果が子どもの年齢によって異なるかを検討した。

まず、子どもが親に抱く信頼感と EXT との直接の関連については、信頼感が主効果として EXT を抑制するに関わるとともに、親友との葛藤関係との交互作用が EXT に対して有意であり、親に抱く信頼感が高くても、親友との葛藤関係が高いと、低い場合に比べて EXT の得点が高くなっていた（Figure 2）。本研究は、子どもの年齢を中学生にまで拡張し、この時期の EXT のリスク要因となり得る親友との葛藤関係（Kupersmidt et al., 1995）に注目している。そのため、Chen et al. (2005) が扱った仲間集団での反社会性とは異なるが、両者は関係性の特徴に攻撃性が含まれる点で類似すると考えられる。また、親友との葛藤関係の高さがストレスとなり、怒りなどの情動反応と共に攻撃性を高めるという知見（Carter et al., 2006）を合わせれば、小学校高学年生や中学生では、親子間の情緒的な関係性が良好なことによる EXT への抑制効果が、仲間や親友との関係に攻撃的な特徴があることや、親友との葛藤からストレスを感じることににより軽減されると言えよう。

つぎに、子どもが親に抱く信頼感の高さが自尊感情を高めることを介して間接的に EXT を抑制することについては、媒介分析からそのパスが有意であり仮説 2 は支持された。本研究は横断調査によるものだが、欧米の先行研究（Kim & Cicchetti, 2004）と同様に日本のデータでも、当該時期の子どもにとって親と情緒的なつながりがあることが自尊感情を高め、間接的に EXT を抑制することが示された。

また、調整媒介分析の結果（Figure 3）では、自尊感情と親友との葛藤関係および年齢との 2 次の交互作用が EXT に対して有意であり、親友との葛藤関係が低い場合には、自尊感情の高い方が、低い方に比べて EXT が有意に低かった。こうして自尊感情の高さが EXT の低さと有意に関わることで、親に抱く信頼感から自尊感情を介して EXT を抑制する間接効果は有意となった（Table 3）。

しかし、親友との葛藤関係が高い場合には、自尊感情が EXT 得点に与える有意な影響はみられず、高低どちらのときも EXT 得点が高くなった。自尊感情と EXT 間に有意な関連がないことで、親に抱く信頼感が EXT を抑制する間接効果も有意ではなかった（Table 3）。これらの結果に関して、従来の知見からは、自尊感情が低いと社会への絆が弱くなり（Rosenberg, 1965）、その絆の弱さが反社会的行動への抵抗を減じる（Hirschi, 1969）とされる。自尊感情が低い場合には、それに加えて親友との葛藤関係が高くストレスから怒りや不安が喚起される機会が多くなり（Carter et al., 2006）、リスク要因が加算されること（Evans et al., 2013）で EXT が高くなったと考えられる。一方、自尊感情と親友との葛藤関係がともに高い場合に EXT が高かったことは、自己本位性脅威モデル理論（Baumeister et al., 1996）から解釈できるだろう。今回使用した親友との葛藤関係尺度には、けんかや口論などの他に、親友が自分の言うことを聞かず、ときに自分の悪口を言うなどの項目が含まれていた。この尺度得点が高い子どもは、親友との日々のいざこざによるストレス（Carter et al., 2006）に加えて、自己の存在が否定されるやりとりも多く経験していることになる。自尊感情が高い状態であっても、親友との葛藤関係から自我脅威を知覚する程度が高まることで、反動的な攻撃性が高まり、それを繰り返すことで不注意や衝動性が高まったと推測されよう（Dodge et al., 1997）。Salmivalli (2001) は、自尊感情が高い人の中には攻撃性が高いサブタイプが存在するために、攻撃性との関連を調べる際には、自我脅威を感じる個人差や自尊感情の安定性を考慮すべきであると主張している。今後は、こうした要因も含めて自尊感情の状態を

詳細に検討することが課題とされる。

本研究では、児童期から青年期にかけて子どもの対人関係における親友の重要性が増すという知見 (Newcomb & Bagwell, 1995) を基に、仮説 4 として親友との葛藤関係による調整効果が子どもの加齢に応じて強くなると予測していた。自尊感情と親友との葛藤関係および年齢との 2 次の交互作用が有意であり、単純傾斜分析の結果 (Figure 3) から、年齢が高く親友との葛藤関係が低い場合に、自尊感情が EXT を抑制する効果がより高くなる傾向はみられた。しかし、Table 3 に示した間接効果の結果では、子どもの年齢の高低による調整効果はみられず、年齢よりも親友との葛藤関係が、親に抱く信頼感から EXT への抑制的な間接効果に影響する主要な要因であると考えられた。仮説 4 が支持されなかったことは、小学校高学年から中学生にかけては対人関係における親友の重要度に差がなく、この時期の子どもは年齢によらず、親友との葛藤経験が多いと親との情緒的な関係性による EXT への抑制効果が軽減されることを示唆している。

以上から、児童・思春期では子どもの親との情緒的な関係性の高さが直接的に、また自尊感情の高さを介して間接的に EXT を抑制するように関わることが示された。日本の自尊感情と心理社会的な適応との関連を扱った研究は、これまで抑うつなどの内在化型問題行動に注目する傾向にあり (古荘, 2009)、EXT との関連を示したことは当該分野に新たな知見を加えるものであろう。

その一方で、自尊感情が高くかつ親友関係で葛藤する経験が多い場合には、自我脅威が喚起されその対処行動から EXT が高まる可能性がみられた。親子間での子どもの友人関係についての会話は、小中学生を通じて子どもの成長に伴い減少するという報告 (ベネッセ教育総合研究所, 2010) がある。本研究の結果によれば、親子関係が良好で自尊感情が高く保てている場合であっても、子どもの EXT を抑える上では子どもが親友との関係に葛藤を強く抱えていないかを親が把握することが重要であり、親友関係を良好にするような適切な援助や、必要な場合には介入するピア・マネジメント (Tilton-Weaver & Galambos, 2003) が求められる。

今後の課題

本研究の課題としてまず挙げられるのは横断調査であったことである。今後は、縦断調査から本研究の結果を検証することが求められる。また、今回は子ども自身の評定に基づく調査であったが、例えば仲間関係でのストレスと EXT 間の因果モデルを検討した研究 (Carter et al., 2006) では、評定者が本人か親かによって結果が異なり、親の場合には EXT の高さがストレスを予測する方向性のモデルの適合度が良いと報告さ

れている。こうした評定者の違いは、変数間の独立性を考慮する上でも重要であり、今回使用した子どもの親に抱く信頼感や親友との葛藤関係については、親や親友からも情報を得ることでより客観的に関係性を評価することが可能となろう。

本研究で得られた偏回帰係数や間接効果の値などは、有意であったが大きくなかった。そのため、EXT への説明力がより高い要因からの検討が必要である。例えば、仲間集団と EXT との関連を扱った研究 (吉澤・吉田, 2010) からは、子どもが周囲にいる仲間の反社会的な行動や信念を学習することで EXT が高まるというプロセスが示されている。親友との関係性とともこうした仲間集団での反社会的行動や認知プロセスといった要因も加え、詳細なメカニズムを検討することが望まれる。最後に、仲間関係と攻撃性との関連を扱った研究では性差もみられており (Fanti, Brookmeyer, Henrich, & Kuperminc, 2009)、性別を調整要因とした検討も今後の課題である。

利益相反

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interaction*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Allen, J. P., Porter, M., McFarland, C., McElhaney, K. B., & Marsh, P. (2007). The relation of attachment security to adolescents' paternal and peer relationships, depression, and externalizing behavior. *Child Development, 78*, 1222–1239.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review, 103*, 5–33.
- ベネッセ教育総合研究所 (2010). 第 2 回子ども生活実態基本調査報告書 Retrieved from http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/hon1_1_01.html (2017 年 12 月 15 日)
- Berndt, T. J., & McCandless, M. A. (2009). Methods for investigating children's relationships with friends. In K. Rubin, W. Bukowski, & B. Laursen (Eds.), *Handbook of peer interactions, relationships, and groups* (pp. 63–81). New York: Guilford Press.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2. Separation anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Burt, S. A. (2009). Rethinking environmental contributions to child and adolescent psychopathology: A meta-analysis of shared environmental influences. *Psychological Bulletin, 135*, 608–637.

- Carter, J. S., Garber, J., Ciesla, J. A., & Cole, D. A. (2006). Modeling relations between hassles and internalizing and externalizing symptoms in adolescents: A four-year prospective study. *Journal of Abnormal Psychology*, 115, 428–442.
- Chen, X., Chang, L., He, Y., & Liu, H. (2005). The peer group as a context: Moderating effects on relations between maternal parenting and social and school adjustment in Chinese children. *Child Development*, 76, 417–434.
- Coopersmith, S. (1967). *The antecedents of self-esteem*. San Francisco, CA: W. H. Freeman.
- De Pauw, S. S., & Mervielde, I. (2010). Temperament, personality and developmental psychopathology: A review based on the conceptual dimensions underlying childhood traits. *Child Psychiatry & Human Development*, 41, 313–329.
- Di Riso, D., Salcuni, S., Chessa, D., Raudino, A., Lis, A., & Altoè, G. (2010). The Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ). Early evidence of its reliability and validity in a community sample of Italian children. *Personality and Individual Differences*, 49, 570–575.
- Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1997). Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 37–51.
- Dodge, K. A., & Pettit, G. S. (2003). A biopsychosocial model of the development of chronic conduct problems in adolescence. *Developmental Psychology*, 39, 349–371.
- Donnellan, M. B., Trzesniewski, K. H., Robins, R. W., Moffitt, T. E., & Caspi, A. (2005). Low self-esteem is related to aggression, antisocial behavior, and delinquency. *Psychological Science*, 16, 328–335.
- Epstein, S. (1973). The self-concept revisited: Or a theory of a theory. *American Psychologist*, 28, 404–414.
- Erikson, E. (1963). *Childhood and society* (2nd ed.). New York: Norton.
- Evans, G. W., Li, D., & Whipple, S. S. (2013). Cumulative risk and child development. *Psychological Bulletin*, 139, 1342.
- Fanti, K. A., Brookmeyer, K. A., Henrich, C. C., & Kuperminc, G. P. (2009). Aggressive behavior and quality of friendships: Linear and curvilinear associations. *Journal of Early Adolescence*, 29, 826–838.
- Furman, W., & Bierman, K. L. (1984). Children's conceptions of friendship: A multimethod study of developmental changes. *Developmental Psychology*, 20, 925–931.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1992). Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, 63, 103–115.
- 古荘 純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか——児童精神科医の現場報告—— 光文社
- Galambos, N. L., Barker, E. T., & Almeida, D. M. (2003). Parents do matter: Trajectories of change in externalizing and internalizing problems in early adolescence. *Child Development*, 74, 578–594.
- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581–586.
- Goodman, A., Lamping, D. L., & Ploubidis, G. B. (2010). When to use broader internalising and externalising subscales instead of the hypothesised five subscales on the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): Data from British parents, teachers and children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 38, 1179–1191.
- Harter, S. (1985). *Manual for the Self-perception Profile for Children* (Revision of the Perceived Competence Scale for Children). Denver, CO: University of Denver.
- Harter, S. (1988). Developmental processes in the construction of the self. In T. Yawkey & J. Johnson (Eds.), *Integrative processes and socialization: Early to middle childhood* (pp. 45–78). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Hayes, A. F. (2012). *The PROCESS macro for SPSS and SAS*. Retrieved from <http://www.processmacro.org/download.html> (August 1, 2018)
- Hayes, A. F. (2013). *Introduction to mediation, moderation, and conditional process analysis: A regression-based approach*. New York: Guilford Press.
- Hayes, A. F., & Preacher, K. J. (2014). Statistical mediation analysis with a multicategorical independent variable. *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 67, 451–470.
- Hirschi, T. (1969). *Causes of delinquency*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Jager, J., Yuen, C. X., Putnick, D. L., Hendricks, C., & Bornstein, M. H. (2015). Adolescent-peer relationships, separation and detachment from parents, and internalizing and externalizing behaviors: Linkages and interactions. *Journal of Early Adolescence*, 35, 511–537.
- Kim, J., & Cicchetti, D. (2004). A longitudinal study of child maltreatment, mother-child relationship quality and maladjustment: The role of self-esteem and social competence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32, 341–354.
- Kupersmidt, J. B., Burchinal, M., & Patterson, C. J. (1995). Developmental patterns of childhood peer relations as predictors of externalizing behavior problems. *Development and Psychopathology*, 7, 825–843.
- Lansford, J. E., Criss, M. M., Pettit, G. S., Dodge, K. A., & Bates, J. E. (2003). Friendship quality, peer group affiliation, and peer antisocial behavior as moderators of the link between negative parenting and adolescent externalizing behavior. *Journal of Research on Adolescence*, 13, 161–184.
- Leadbeater, B. J., Kuperminc, G. P., Blatt, S. J., & Hertzog, C. (1999). A multivariate model of gender differences in adolescents' internalizing and externalizing problems. *Developmental Psychology*, 35, 1268–1282.
- 眞榮城 和美・菅原 ますみ・酒井 厚・菅原 健介 (2007). 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成 心理学研究,

- 78, 182–188.
- Muris, P., Meesters, C., Eijkelenboom, A., & Vincken, M. (2004). The self-report version of the Strengths and Difficulties Questionnaire: Its psychometric properties in 8 to 13 year old non clinical children. *British Journal of Clinical Psychology*, 43, 437–448.
- Newcomb, A. F., & Bagwell, C. L. (1995). Children's friendship relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 117, 306–347.
- Nickerson, A. B., & Nagle, R. J. (2005). Parent and peer attachment in late childhood and early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, 25, 223–249.
- 岡田 佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究——二次的反応の生起についての検討—— 教育心理学研究, 50, 193–203.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, 29, 611–621.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rothbaum, F., & Weisz, J. R. (1994). Parental caregiving and child externalizing behavior in nonclinical samples: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 116, 55–74.
- 齊藤 彩・松本 聡子・菅原 ますみ (2016). 児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連 パーソナリティ研究, 25, 74–85.
- 酒井 厚 (2005). 対人的信頼感の発達 児童期から青年期へ——重要な他者間での信頼すること・信頼されること—— 川島書店
- Salmivalli, C. (2001). Feeling good about oneself, being bad to others? Remarks on self-esteem, hostility, and aggressive behavior. *Aggression and Violent Behavior*, 6, 375–393.
- Schneider-Rosen, K., & Cicchetti, D. (1991). Early self-knowledge and emotional development: Visual self-recognition and affective reactions to mirror self-images in maltreated and non-maltreated toddlers. *Developmental Psychology*, 27, 471–478.
- 菅原 ますみ・北村 俊則・戸田 まり・島 悟・佐藤 達哉・向井 隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達——Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から—— 発達心理学研究, 10, 32–45.
- Tilton-Weaver, L. C., & Galambos, N. L. (2003). Adolescents' characteristics and parents' beliefs as predictors of parents' peer management behaviors. *Journal of Research on Adolescence*, 13, 269–300.
- Van Roy, B., Veenstra, M., & Clench-Aas, J. (2008). Construct validity of the five-factor Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) in pre-, early, and late adolescence. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 49, 1304–1312.
- Vitaro, F., Tremblay, R. E., Kerr, M., Pagani, L., & Bukowski, W. M. (1997). Disruptiveness, friends' characteristics, and delinquency in early adolescence: A test of two competing models of development. *Child Development*, 68, 676–689.
- 吉澤 寛之・吉田 俊和 (2010). 中高校生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響——社会的情報処理モデルに基づく検討—— 実験社会心理学研究, 50, 103–116.

—— 2018. 1. 18 受稿, 2018. 9. 15 受理 ——